大正政変前夜

―「遅れてきた元老」桂太郎を中心として

千葉　功

学習院大学文学部研究年報　第58輯　抜刷　（平成二三年度）
Off-printed from The Annual Collection of Essays and Studies,
Faculty of Letters, Gakushuin University, Vol. LⅧ (2011)

大正政変前夜
―「遅れてきた元老」桂太郎を中心として

千葉　功

はじめに

大正政変に関して、多くの研究が積み重ねられてきた。その中でも、近年は、桂太郎の新党構想の位置づけが焦点となってきている。

季武嘉也は、論文「第一次護憲運動」（井上光貞ほか編『日本歴史大系五　近代二』、山川出版社、一九八九年）で、桂が新党結成の準備を進めていたことを、政友会の中でも桂に近い野田卯太郎が察知して事前に攻撃したことを指摘した。これは、従来の研究の論調である、護憲運動の高まりによる苦肉の策として桂が新党を結成したという見方を、逆転して見せたものである。

また、櫻井良樹は、論文「立憲同志会の創設と辛亥革命後の対中政策」（『史学雑誌』第一〇三編第二号、一九九四年）によって、辛亥革命以後の西園寺内閣の外交政策に不満な桂が新党構想にふみきったと解釈した。これは、従来国内要因のみから大正政変―桂新党を分析して来た先行研究に対して、新たな視点をもたらすものであった。

さらに、小林道彦は、桂の伝記『桂太郎　予が生命は政治である』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年）の中で、桂が元老政治と決別し、かつ軍を抑え込むために新党結成にふみきったことを強調する。近年、大正政変ないし桂新党に関

する解釈では、この小林氏によるものが有力である。

しかし、桂が元老政治への決別をはかったことを強調するあまり、桂の元老意識が捨象され、桂新党の性格に対する評価が偏ったものとなっていると思われる。本稿では、桂を「遅れてきた元老」と規定することによって、新たな視点から、桂が新党結成を決意する過程を見ていこうとするものである。

1　西園寺内閣への不満

「遅れてきた元老」として

首相在任中の一九一〇（明治四三）年一月ごろ、ドイツの新聞に、桂が含雪（山県有朋の号）学校から春畝（伊藤博文の号）学校へ転校したとの論説が出た。桂は勝手な評論であると否定しているが、[1]内心まんざらでもなかったのではないかと思われる。実際、桂は政友会との情意投合にあたって、「憲政有終の美を済さん」というように、伊藤の口ぶりと似たようなことを言い出すに至っていた。[2]

また、政友会との政権授受交渉のころ、桂は原に対して、「自分は一方の大将たることは之を望まざる訳なり」と語っていた。[3]西園寺内閣成立以後も情意投合を継続させたい原からは「憲政実施後の元老は君より始まる」と言われて、桂は得意の色を表している。[4]

さらに、田健治郎に対しては、「其の自ら期する所、遥かに伊藤、山県の上を凌駕し、天下の諸豪を挙げて、之れを其の薬籠中に措かんと欲す」とも語ったという。[5]

そして、第二次内閣総辞職時に、桂は元勲優遇の詔勅を受け、正式に「元老」の仲間入りを果たした。

このころの桂には、自分こそが今は亡き伊藤に代わって元老筆頭であり、天皇の信認も厚いとの自負があっただろう。

そして、元老筆頭意識には、自分ならば外交から内政、特に財政まで幅広く担当できるとの自負と、よって自分は特定の勢力ではなく全体を代表するものであるとの自負が裏打ちしていた。大正政変時に桂は政党組織に乗り出し、その出発点は「立憲統一党」構想というものであったが、特定の勢力ではなく全体を代表する意識が「立憲統一党」構想を推し進めたと推測される。

一方で、桂は、元老に仲間入りしたが、後から追加される形で元老となった、いわば「遅れてきた元老」であった。よって、桂自らが政権を担当するときは、山県ら上の世代の元老を政治に介入するものとして捉え、排除し、元老政治との決別をはかる。しかし、桂が在野のときには、自らも元老の一員として西園寺内閣の外交政策や財政政策に介入し、その政策が無作為であると非難する。第三者から見れば御都合主義とも受け取れるが、桂個人からすれば何ら矛盾するところはなかったのであろう。

西園寺内閣の財政政策への不満

一九一一年八月三〇日、第二次西園寺公望内閣が成立した。この時点で桂は自分の後継者として、桂自身のように外交と内政全体をひとりで担当できる人材がいないと判断して、外交では小村寿太郎、内政（植民地統治を含む）では後藤新平を部分的後継者と考えていたようである。よって桂は、この二人が西園寺内閣でも留任するよう画策する。明治天皇から西園寺に対して、小村と後藤の留任が示唆されたのである。[6] しかし、政友会内閣としての純化を決断した西園寺は、天皇の示唆を拒否したのであった。[7]

第二次西園寺内閣の組織の際は、第一次のときと違って、桂は西園寺から相談に預からなかった。このこと自体不満だったが、さらに、西園寺内閣の蔵相に山本達雄が任命されたことに対して、桂は意外千万と受けとめている。な

ぜなら、山本は実業界に勢力もなく、大蔵省でも重視されないと考えたからである。しかしながら、政友会からすれば、桂が喜ばない山本だからこそ蔵相に起用する意味があったのである。[8]

蔵相に山本達雄を任命したことにとどまらず、西園寺内閣が九月中旬になっても何の方針も公表しないことや、財政が危機的状況にありながら「機を好む者」たちがしきりに吠えたてることにも不満であった。政党は地方選挙や党勢の拡張ばかりに熱心であるが、財政方面の将来の施設いかんによって政局の将来が定まると桂は見ていた。[9] このように無作為な第二次西園寺内閣に対する不満は、第一次のときと同様であった。[10]

西園寺内閣がなかなか来年度予算案を作成しないのも不満であったが、いざ予算案が出来上がってみても、予算の引き当てなくして海軍が再来年度予算で拡張に着手することを西園寺内閣が承諾したことに、驚愕している。[11] 西園寺政友会内閣は緊縮財政を方針とする点で桂内閣と同じであったが、行財政整理で生まれた余裕を減税や軍備拡張（特に海軍拡張）にふりむけようとする点で異なっていた。[12] そして、海軍拡張費や減税の財源捻出のために、西園寺内閣は、桂内閣が設置した拓殖局・生産調査会の廃止や、減債基金の廃止までをも射程に入れていた。この事態に、桂や桂系官僚は強く反発する。[13]

辛亥革命の勃発

一〇月一〇日、隣国の中国で辛亥革命が勃発する。桂はこれほど早く突発するとは見込んでおらず、二二日時点では「隣家之火事、少々早きに失し申候」と後藤新平に述べている。[14] 西園寺内閣は二四日の閣議で、満州の現状維持と「中国本部」における優越的地位の期成を決定したが、これは元老の山県や桂、山本権兵衛（軍事参議官）の同意を得ていたものであった。[15]

桂は翌月には、今回はうやむやのうちに一時的には片づくにせよ、結局清朝は廃滅し、義和団事件のときのような混乱が再現すると予想している。そのため、イギリスやロシア、特に同盟国である前者と意思疎通して同一歩調を取るよう西園寺首相や内田康哉外相に忠告した。[16]

内田外相は一一月二八日の閣議で、イギリスとの意思統一のもと、共和制ないし清朝専制という両極端を排した立憲君主制採用を清朝に促し、それを実現するため官軍と革命軍の調停を斡旋することを決定した。この閣議決定は元老の山県・井上馨・松方正義や桂、陸軍の寺内正毅、海軍の山本などの同意を得たものであって、[17] 桂からは、閣議決定は「既ニ小生ヨリ提出仕候意見ヲ全部採用有之候」ものと受け取られた。[18]

しかし、立憲君主制による事態収拾案をイギリスに打診したところ、拒絶された。また、四国借款団問題でも、イギリスとの間で意見の一致を欠いた。このようなイギリスとの行き違いは西園寺内閣の不手際として、桂や山県には認識された。[19]

さらに、日本に秘して行われたイギリスの仲介工作により、中国では官軍と革命軍が停戦、一二月一八日より上海で講和交渉が開始されるに至った。日本からすればイギリスに出し抜かれた形となったが、西園寺内閣はこれに追随せざるをえず、一二月二二日の閣議と二四日の元老会議で、立憲君主制の樹立による中国の内乱収拾を断念して、成り行きにまかせることを決定した。

このころの外交方針として特異なところでは、後藤新平のそれが挙げられる。彼は、「老大帝国」清朝の崩壊による道徳心の衰微という「伝染性疫毒」の浸潤を防ぐためにも、対独提携の必要性を桂に訴えた。[20] ただし、「日英同盟骨髄論」者の小村寿太郎を信認して外交政策をまかせていた桂は、後藤の対独提携論は採用しなかったであろう。

年が明け、一九一二（明治四五）年一月一日には南京で臨時政府が成立、孫文が臨時大総統に就任するとともに、

国号を中華民国と定めた。立憲君主制による中国動乱収拾の可能性はますます低下した。

一方、前年末の一九一一年一二月一日に外蒙古が独立宣言を行っていた。ロシアは一九一二年一月一一日に独立宣言を支持する声明を発表したが、蒙古に対するロシアの特殊関係を述べるにあたって外蒙古に限定されていないところがあった。危機感を抱いた陸軍首脳部はその関心を中国全土よりも満州権益の擁護に集中させるようになり、たとえば寺内正毅（朝鮮総督）は「南清は当分自然に任すとも、満洲は如何御処分相成候御意見に御座候や」と桂太郎に問いかけた。[21]

桂・寺内ないし山県ら陸軍長老の念頭にある対策は、新日露協商の締結と満州出兵であった。前者は、第二次日露協商では何ら規定されていない内蒙古の勢力範囲を設定するためのものである。また、後者は、中国における停戦の破裂、革命軍の北上、清朝の満州蒙塵といった可能性の浮上に対処するためのものである。山県は一月一五日付けで「対清政略概要」を、桂を通じて内田外相に提出、その中で山県は満州駐屯中の第五師団のほかに二個師団を派遣することを提起していた。[22]

結局、一月一六日の閣議では、満州出兵抜きに、新日露協商締結のみが決定された。このあと日露間で交渉に入り、七月八日、第三次日露協商が締結された。これにより第一・二次日露協商の分界線を西へ延長して、内蒙古を日露で東西に分割した。この結果、東部内蒙古が日本の勢力範囲に加わり、日本にとっての「満州問題」は、東部内蒙古とあわさって「満蒙問題」へと発展することとなった。また、日本が構築してきた多角的同盟・協商網の中でも、中軸であったはずの日英同盟の比重が低下するのと反比例して、日露協商の比重が上昇した。

西園寺内閣の外交政策への失望

満州出兵抜きを閣議決定したように、西園寺内閣は満州出兵に消極的であった。この消極さに、元老の山県や桂はとても不満であった。特に、西園寺の後継をねらっていたであろう桂の非難は激しく、西園寺内閣は隣国の混乱を「隣の火事」視し、また総選挙の準備に忙しく、国家のことを現在・将来に向けて考慮する者がどれほどいるのか、西園寺首相などは病気と称して大磯に転地したままであり、英雄の間日月か、はたまた「のんき」か判然としないとの憤懣を、桂は寺内にぶつけている。[23] また、西園寺首相や内田外相が外国からの批判を考慮し、議会に満州出兵経費を請求したら議論百出で外面に洩れることをおそれて満州出兵に消極的であるとの情報を、桂は石本新六陸相から得ていた。[24]

桂は朝鮮の明石元二郎宛ての書翰の中で、満州に関して、特殊の利権を護るのは日本の義務であり、現地の情勢に顧みていつ出兵するかもしれない旨をすみやかに声明すべきだと、当局者にも忠告したという。[25] しかしながら、イギリスの奉天総領事が中国の東三省総督に対して、袁世凱の政策を援助すべきだと勧告をしたように、イギリスに「一歩満洲に足を入れられた形勢」で、日本の満州出兵は困難至極の大勢となりつつあった。[26] こうして出兵機会が日一日と減少していくことに、桂・山県・寺内らは痛憤していた。[27]

このように、桂は西園寺内閣の施政に対し、「財政外交、此両方面は尤も困難」であると強い憂慮を示している。[28] これは第一次西園寺内閣末期における激烈な批判と共通していた。

当の中国では、二月半ばから三月にかけて、動乱はひとまず終息の方向に向っていた。二月一二日、清朝皇帝は退位の上諭を発した。孫文は一四日、臨時大総統の辞任を表明、三月一〇日、北京で袁世凱が臨時大総統に就任した。

共和制で事態が収拾されつつあることは、陸軍にとっては満州出兵ないし日露による満州分割の口実となる満州での混乱が収まり、好機が遠ざかることを意味した。例えば、寺内は「夫に就候ても我政府之決意は那辺に有之候や。

満洲之処分も今以為何決意之程不被伺、中央に於て借款も甘く不参、実に残念至極に被存申候」という。そして、本野一郎（駐露大使）が伝えてきた、日露による満蒙分割というロシア政府の意向を、「外務大臣一存にて拒絶に仝しき返事を被致候様」に聞きつけ、憤慨している。[29]

それに対して桂も、「満洲問題に付ても随分苦言を提出致候へ共、馬耳東風に有之、終始時機を失し申候。一喜一憂甚敷、前途実に心配に有之申候」と寺内に不満を訴える。ちなみに、桂は自分のことを、西園寺内閣の「番人」として任じていた。[30] 桂からすれば、中国がこのような「土崩瓦解之有様」のときこそ、「帝国の充分働を要する時なるは勿論、今日迄積み来りし帝国の苦辛も今日之場合を予期しての事」であるにもかかわらず、西園寺内閣の事なかれ主義は遺憾千万に感じられるのである。しかし、西園寺内閣は、桂という「お留守番人」の苦言も聞き捨ててしまう。[31]

このように、桂は、辛亥革命をめぐる西園寺内閣の外交政策に失望した。西園寺内閣の外交政策に対する失望は、財政政策に対する不満とあわさって、桂をして桂園体制を放棄し自ら政党結成にふみきらせる大きなきっかけとなった。

そして、同時期の四月に、桂は山本権兵衛の仲介で、一時帰朝中の加藤高明と会見、関係修復がなされた。[32] これは、動揺の見え始めた日英同盟の再強化を図るため、日英同盟を外交政策の骨子とする方針を確守する旨の親書を天皇からイギリス皇帝に送る工作に加藤が奔走していた際のことと考えられる。小村外相が存命中の一九一〇年時点では、桂はイギリスとの条約改正交渉をめぐって、加藤のことを罵倒していた。[33] しかし、小村亡き（一九一一年一一月死去）いま、小村と同様に「日英同盟骨髄論」者である加藤との関係修復は、桂園体制後の新体制を模索していた桂にとって大きな政治資産となるであろう。

2　外遊の持つ意味

桂の外遊とその目的

隣国の中国情勢が小康化し、目下国内外の情勢も急激な変動は来ないと予想して、桂は欧州行を決断した。それは、一九〇〇年に陸軍大臣を辞任したあとに抱いた志望を、一〇年ぶりに果たそうとするものであった。桂は山県から賛成を取りつけたうえで、朝鮮総督の寺内正毅からも同意を得ようとした[34]。寺内は本年末までに帰朝する旅行ならば仕方ないとして同意したうえで、満州・シベリアはもちろん、ヨーロッパ各都市でも、朝鮮人がいるところでは、韓国併合の主謀者である桂暗殺の危険性があるとして、注意を促した[35]。

一方、同じ理由から満州やチタ通過の見合わせを要請した白仁武（関東都督府民政長官）に対しては桂は無責任であると罵りつつ、欧州行を強行した[36]。

元老の山県ないし、西園寺首相が明治天皇に内奏したうえで、五月三一日、桂自身が参内して、天皇から勅許を得た[37]。

七月一日には、原敬内相と対談しているが、桂には他日再び内閣を組織し、その際は今回の洋行に同行する後藤新平・若槻礼次郎を入閣させる気があることを、原は看取している。また、桂は原には、自分には政党を組織する意志はないと明言した[38]。

ちなみに、桂は出発の直前、ある学校で講演を行っている。その講演の中で桂は、今日日本は世界大国の班に列し、将来は一層重大な責任を持つという。日本人はイギリスと同盟してアジアの安全を保つことになっているが、決して他人頼みせず、日本人が単独で今日の全局を担当する覚悟がなければならないという[39]。

外遊については、桂は何ら政治上の意味を含まない漫遊であることを強調していた[40]。しかし、本人自身も外遊によ

る新知識の獲得が国家に貢献するものと自負していた。[41]

ましてマスコミは、多くの憶測を流した。たとえば『東京朝日新聞』はロシアの『ノーウォエ・ウレーミヤ』が報じた東京来電を掲げ、桂は故伊藤博文と同じく日露同盟を提議するためサンクト・ペテルブルグを訪問すると報じた。[42]さらに、イギリスの『タイムズ』も桂の欧州行の目的などに関する露都電報や東京通信を掲載したために、グレー外相なども多大の注目をはらっていた。[43]

随行した若槻礼次郎によると、桂の訪欧には、ロシアの政治家との外交に関する意見交換、イギリスでの政党調査、ドイツでの休養の三目的があったという。[44]一方、桂の訪欧目的のうち、対外政策に関する側面において、同じく随行した後藤は外交的側面を重視し、対中政策に関して「ドイツ皇帝を始め、英、仏、露三国政府に対する諒解運動」だったという。[45]また、渡辺千秋宮相からは、西欧における皇帝・皇太子・帝室等に関する調査も依頼されていた。[46]

もちろん、桂は後藤と異なり、日英同盟の破棄ではなく、維持・強化を考えていた。「日英同盟締結当時の主人」であることに強い自負を抱く桂[47]としては、日英同盟は依然として日本外交の基軸であっただろう。七月のロイター東京通信員との会見では、日英同盟の必要や利益が低下したとの日本の新聞報道を強く否定、「今日程該同盟ノ存立ヲ必要トセル時期ハナシ、如何トナレハ支那ニ於ケル現下ノ事態ニ鑑ミ該同盟ハ凡テ極東問題ノ基礎」であり、また「日英同盟ナカリセハ両国ノ〔注：中国における〕利害相背馳スルノ虞ナシトセス」と、日英同盟が最重要であることを繰り返した。[48]同様の趣旨は、前述の学校での講演会でも、強調している。[49]

すなわち、日独双方の新聞が敵対的であるため冷却化していた日独関係を改善することは考えても、[50]たとえば協商など、それ以上の接近にまでふみこむ気は桂には全くなかったであろう。それに、出発前、内田外相からも、「日仏又ハ日米協商ニ類似セル協約ヲ日独間ニ締結スルコトハ各方面ニ亘リ慎重ナル考慮ヲ要スヘキモノナルヲ以テ、仮ニ先

方ヨリ本件ニ関シ何ラ言及スル処アルモ、容易ニ之ニ応セサルコト」と釘を刺されていた。[51]

ロシアからの引き返し

七月二日には単独拝謁と下賜品を得て、[52] 六日、新橋駅を出発した。[53] 大連から満鉄・東清鉄道・シベリア鉄道と乗り継いで、二一日、サンクト・ペテルブルグに到着した。

桂は七月二二日にロシアのココツフォフ首相と会談した。二六日にはサゾノフ外相と会談しているが、その席で桂は、できる限り列国の猜疑を避ける点から、サゾノフの求める日露の満蒙分割を拒絶した。そして、日露協商と日英同盟の義務との調和や、中国に利害関係を有する日露英仏四ヵ国における意見交換の必要を説いた。なぜなら、日本は満蒙のみならず中国南部でも利害関係を有するので、イギリス・フランスとの妥協も必要だからだ。[54] また、桂は同様の趣旨、すなわち「東洋平和の基礎なる日英同盟の儼として存するは、寸時も忘却を許さゝる」ことを、加藤高明（駐英大使）には弁解的に述べている。[55]

ちなみに、桂はロシアの首相・外相と面会した際、日露戦争と戦後の日露協調との関係について、「〔注：日露戦前の日露関係が〕若し其儘に経過したらんには両国の国交は到底善良に赴く見込無之、寧ろ両国間に横はり候雲霧は一たひ雨となり風となるにあらされは空気の一洗を期し難かりし事」を説いたと、これまた加藤に説明している。[56]

サンクト・ペテルブルグ滞在後はロンドンに移る予定であったが、八〜九月は皇帝以下主なる政治家は避暑中で面会できないだろうとの加藤の忠告もあって、一〇月に渡英することにした。[57] その間はスウェーデン・ノルウェー・デンマークを経てスイスに留まり、同国における外国人観光客の待遇設備・方法を観察することにした。また、イギリスの後はフランス・ドイツへ渡るつもりであった。アメリカにも立ち寄りたかったが、大統領改選期のため遠慮して、

他日に期することにした。[58] 原敬が一九〇八～九年の外遊の際、アメリカ行を含めたことによって、アメリカの活力を目の当たりにして、以後アメリカとの協調を重視するようになったのと対照的である。

ドイツでは桂が親独主義政治家で、遠からずまた政権を掌握すると見られており、前拓殖務相デルンブルグらが桂・後藤一行を歓迎すべく準備を進めており、また畑良太郎（駐独大使）は、日独間の相互誤解を解消するために、プロシアの大蔵次官ミヒャエリス（かつて、独逸学協会学校で、桂が校長のもと教師を務めたことのある人物）らを幹部とした有力な和独会を創立しようと、これまた準備を進めていた。[59]

しかし、桂がサンクト・ペテルブルグに到着した七月二一日、ロンドンの加藤から東京ロイター通信社の電報として、明治天皇が人事不省に陥ったとの情報を知らせてきた。[60] 桂からすれば断腸の思いであるが、やむなく欧州行を中途で断念して帰国せざるをえなくなった。桂たち一行は、これからの予定を全てキャンセルしたうえで、二八日夜、サンクト・ペテルブルグを出発、モスクワを経由して、帰朝することに決した。[61]

宮中へ

七月三〇日、明治天皇が没し、皇太子嘉仁が践祚するとともに、大正と改元した。

桂たち一行は八月一〇日に神戸へ上陸、東海道線を東上して浜松まで来ると、寺内が迎えに来ていて、桂と長い間話し合った。[62] 一一日、桂は新橋駅に到着し、ただちに三田の私邸に入った。同日付けで平田東助からも書翰が届けられたが、これは山県の意を受けて、桂が他の人に面会する前の面談を希望したものであった。[63] 寺内や平田の面談は、桂に内大臣就任を承諾させるものだったのであろう。意を決した桂は、翌一二日、訪問してきた原に対して、政府と宮中が将来の国論統一のため尽力する必要があると語っている。[64]

結局、八月一三日に桂は内大臣兼侍従長に任命されたが、これは徳富蘇峰によると、桂の増長によって彼への態度が冷淡になった山県によって宮中へ押し込められたのだという。実際、同時代においても桂の宮中入りに関して種々の揣摩臆測がなされ、中には山県と桂の関係を論ずる者もあった[65]。しかし、山県閥にとって、宮中を抑え、宮中といかに連絡を取るかは大事なことであった。桂が首相だったときも、徳大寺実則や田中光顕、岩倉具定、渡辺千秋といった宮中関係者と頻繁に連絡を取り合っていた。山県が桂を宮中に送り込んだのも、山県からすれば自然な選択だったのであろう。

他方、同年四月以来、桂へ急接近していた加藤高明は、桂の宮中入りに対して、大革新を要する政治方面から桂が当分退くことへの遺憾と、新天皇に常時輔弼することの慶事とを、あわせて桂へ伝えた[66]。ただし、加藤が率直に思うには、桂の宮中入りに対して世上非難が多いのは「畢竟同公ノ平常智余リアリテ徳足ラサルニ基因スル」と考えていた[67]。

桂は、内大臣兼侍従長の仕事に取りかかった。彼は、大正天皇の日課・進講案を作成している[68]。さらに、皇太子の養育・教育方法についても、桂は九月一日付けで、青木周蔵に現ドイツ皇帝の皇太子時代の実例を照会している。桂自身の考えでは、「或は武に片向き過くるも悪敷、又文に片向は元より宜しからず候」と、「文武兼備」がその方針であった。そのため、何歳ぐらいまでは武のみの教育をし、何歳ぐらいから文の教育も要するかといったことは、やはり調査することが必要であった[69]。また、桂は天皇の「恩威を国民に感触せしむるの方策」を考案して山県に送付したが、世論を喚起して物論囂々となることを危惧した山県によって却下されている[70]。

このほか明治天皇の大喪関係もあって、桂は毎日毎日朝から夕方にかけて、新天皇の君側勤務を務めなくてはならず、多忙をきわめた[71]。大喪当日の九月一三日には乃木希典夫妻の殉死があり、その後始末にも寺内ともども忙殺された。

渡辺宮相と相談した結果、三万円の下賜と、乃木家再興が決まった。[72]

また、国家治安の観点から、社会主義者も大赦減刑の範囲に含める点で原内相と意見が一致し、桂はこのことを宮中関係者に説いていた。さらに、原には、「危険」な朝鮮人への取り締まりについても尋ねている。[73]

3　自負と不評と

二個師団増設問題の政治問題化

桂が内大臣のころ、陸軍の求める二個師団増設（増師）案が西園寺内閣の行財政整理方針と抵触し、急速に政治問題化していた。

桂は、少なくとも在職中の一九一一年四月時点では、二個師団増設は必要ないと考えていた。[74] また、桂が洋行に出発する直前の七月一日時点には、「陸軍拡張は不可なり、其事は陸軍側にも告げたり」と原に語っている。[75] しかし、他方で、桂は洋行前、沖守固に対し、一〇月頃までには増師問題で内閣を倒すべしと打ち明けたという。このことは真偽不明であるが、のちに事実として流布することになる。[76]

帰国直後の八月一二日には、事務整理のほかは減税問題も海陸軍増設問題も一切中止してはどうかと原に語っている。[77] また、八月一六日に西園寺と、一八日に原と会見した際には、二個師団増設問題は山県の主張なので、山県と直接交渉するのが得策で、そのあとならば自分が口を出す機会もあろうと語っている。原に対してはさらに、上原陸相の顔を立てるために朝鮮国境兵を置くぐらいのことで妥協可能であると、楽観的な見通しを示してもいた。[78]

このように、二個師団増設問題に関して桂が本気に介入する気があれば、もしくは首相として自ら対処するのであれば、陸軍拡張・海軍拡張・税制整理（減税）の全ての中止という、陸軍・海軍・政党の三者の痛み分けによる解決

を考えていたと推測される。

しかしながら、九月上旬時点で桂が後藤から得た情報によると、西園寺首相が臨時制度整理局の特別委員に内示した整理方針では、「海軍充実の財源を得ること」「進んで減税を図ること」とされたのに対して、二個師団増設計画は除外されていた。陸軍拡張は拒否しつつも、海軍拡張や減税は認めたため、行財政の完全な整理は至難が予想された。また、陸軍拡張が拒否された陸軍の上原勇作陸相は、辞任を振りかざして内閣の整理案に抵抗するであろう。軍部大臣現役武官制である以上、上原陸相の辞任は、西園寺内閣の倒壊という重大問題を惹起する。[79]

山県や上原陸相ら陸軍が強硬だったのは、単に増師問題にとどまらず、西園寺内閣が政党政治の目的を達しようとの陰謀をめぐらしていると考えたからであった。山県が田中義一に渡し、また上原を経由して桂にも渡った匿名の政界情報は、西園寺政友会内閣と対決すべき「君主主義の一派」が足並みも陣容も整わないにもかかわらず、敵（西園寺政友会内閣）を侮ることに警告を発していた。[80] 陸軍の危機意識を背景として、二個師団増設問題は内閣をゆるがす重要な争点と化していく。

東アジア情勢への危機感

西園寺内閣が苦境に陥っていたにもかかわらず、桂には西園寺内閣を支援する気はなかった。それは、当時の東アジア情勢に対する危機感に所由していた。

本野一郎（駐露大使）は、中国新政府（袁世凱政府）承認の先決問題として、イギリスがチベット問題を、ロシアがイリ条約改定問題を、それぞれ持ち出していることに対抗して、日本も満州権益（関東州・満鉄）の期限延長問題などを持ち出すことを、内田外相に具申した。しかし、内田は消極的であった。

本野は、桂の訪露時の関係から、桂にも書翰を送っていた。その中で本野は、イギリスやロシアが既に中国に対して強硬な政策を取る以上、日本も満蒙における利益保護のため相当の手段を取る必要があるという。日中間で将来不可避の紛争は、返還期限の迫っていた関東州ないし満鉄問題（例えば、関東州の返還期限は一九二三年であった）であるが、今さら返還できない以上、「支那の領土保全主義ニ違反セサル範囲ニ於テ、之ヲ我有ニ帰セシムル」ためには租借期限を延長しなければならない。これを中国に要求する場合は中国の反発が予想される以上、中国の混乱状態という好機に乗じて、ロシアと協議のうえ関東州租借期限延長を中国新政府の承認条件とすれば、割合簡単に成功するのではないか。少なくとも、「必す支那現今の事件平定の後に本問題を提起するよりも労力を要すること無論より少なかるへき」と、本野はいう。[81]

以上見てきたように、のち一九一五年に加藤高明外相が行った対華二一ヵ条要求の萌芽がここに表れているのである（ただし、対華二一ヵ条要求の際は青島返還を代償としたのに対し、このときは袁世凱政府の承認を代償としていた）。

本野から書翰を受け取った桂も、西園寺内閣が外交面で不活発であることに対して、「内国之事は何れに相成候共、致方無之事に致候而も、外国に関する事は全世界之活動時期に我か帝国丈けは休止同様之有様なるは誠に気遣し敷もの[カ]に候」との不満を山県に吐露している。桂は「聖上之佐居者」という立場にもかかわらず、内田外相へ意見を陳述している。[82]西園寺内閣の外交に対する憤懣を桂・本野と共有する寺内も、内蒙古の勢力範囲を規定した第三次日露協商は全く紙上の論にすぎず、日本もロシアに対抗して満蒙における処分を実行すべきだと桂に訴えている。[83]

自らの外交・財政手腕に自信をつけていた桂が、再度総理大臣となって、理想の外交・財政政策を断行する志望を抱いたのも、至極当然であった。西園寺はおろか、寺内も後継首相としては駄目で、桂自ら内閣を担当するつもりであった。[84]

第二次西園寺内閣の倒壊

よって、桂は二個師団増設問題で苦境に陥っている西園寺内閣に対して、冷淡であった。実際、桂が積極的に陸軍と西園寺内閣との間を調停した形跡はない。西園寺から見ても、桂に陸軍を抑える気があるのか曖昧であった[85]。桂が原と会談した際も、かつて原に語った方針とは相違して二個師団増設の来年度からの実施を唱えたが、再来年度からの実施を妥協ラインとする原からは受け入れられない話であった。桂が誠意をもって時局収拾にあたらないことに対し、原は他日互いに意外の争いをなすかもしれないと諷示した[86]。

一一月二二日、上原陸相は二個師団増設案を閣議に提出した。そして、二八日は、上原陸相が臨時閣議で説明をする日であった。西園寺が増師を採用しないことに決したとの情報を得た山県は、「実に不容易大事件惹起」したと感じ、これへの対処順序に関する概要を書いて、桂に差し出した[87]。その後、薩派が説得したため一時上原の態度も軟化したが、結局は再び硬化した。三〇日の閣議で二個師団増設案は否決され、上原は一二月二日に辞表を提出、陸軍から陸相後任が得られなかったために、五日、西園寺内閣は総辞職した。

ちなみに、内大臣期の一一月二八日に桂は陸軍軍人としては満期を迎えたが、桂は元帥にするという山県のはからいを拒絶して、そのまま後備役に編入される方を選択した。桂は武家に生まれて、武をもって「一身之業」としていたが、首相になってからは横道に入ってしまい、陸軍という本規の道との両立がはなはだ困難となった。すなわち、桂は横道＝政治家として生きることを決心したのであった[88]。このことはのち、桂が議会政党を結成することの助けとなるだろう。

一二月六日に元老会議が開かれて以後、連日元老会議が開催された。桂も元老の一員として会議に参加している。会議は西園寺に留任を要請して拒絶され、また現在の難問題は財政問題であるとして後継首相に元老の松方正義を推

薦、松方も乗り気であったが、一〇日、正式に辞退した。[89]

この間、桂と山県のあいだでは、国防会議設置が話し合われていた。増師問題は、国防の大体について調査し、その結果によって定めることとして、この国防会議の調査ができるまでは施行しないこととした。[90]

元老会議は後継首相として山本権兵衛・平田東助を推薦したが、いずれにも辞退された。[91] また、平田東助が送付したと推測される文章では、寺内の持論は国防会議設置にあり、国防会議を設置して陸海軍拡をともに延期することになれば寺内への誤解や冤罪が消滅するとして、断然寺内を後継首相に擁立することを桂に勧めていた。[92] 元老会議で桂は寺内を推薦したが、山県が賛成しなかったので沙汰やみとなった。

そして、ついに一四日の元老会議で、後継首相は桂に内定した。[93] 寺内に対する桂の弁明を借りれば、「乍併一方元老諸氏の尽力不得其効、此場合誰れも局面に立ち国家を救済するの任に当らされは、此上は乍恐陛下の命に従ふの不得止は臣下の本分と弁めるの外無之事」なのである。[94]

桂の弁明に表れているように、元老会議が何回も開かれながら後任首相が決まらなかったことは、元老の価値の低下を意味していた。桂自身も他の元老と一切手を切り、再び西園寺と相談して内閣組織に乗り出そうとしていた。[95]

ただし、桂が首相になるには、桂が内大臣兼侍従長として現に宮中にいることが障害であった。そのとき、助け舟を出したのは、実は西園寺であった。桂は、西園寺から「何もそんなに憚つたり、気兼ねをしたりするには及ばない、時として宮中に入り、時として府中に入る、孰れも時の宜しきに随う、西洋にもこんな例があるとか、あんなことがあるとか」[96]という勧説を受けて、内閣組織を決断した。すなわち、「宮中」を出て「府中」に入ったのである。ちなみに、翌年護憲運動の盛り上がりを抑えようとして、桂は、西園寺が桂を推挙して、これを大正天皇に上奏した事実を覚書にまとめて、後藤をして西園寺に認めさせることを行っている。[97]

一七日、府中入りを許可する勅語を、即位したばかりの大正天皇から受けることに成功した。[98]

第三次内閣の組織

桂は内閣組織に際して、元老（正確に言えば、自分以外の年長の元老たち）の政治介入を排除して、内閣が責任をもって政治を行う決意を大正天皇に上奏した。[99] それのみならず、山県本人にも「国政ノ事及バスナガラ弟ノ在ルアリ、多ク元老ノ心ヲ痛マシムルヲ須ヒズ。暫クハ御淋シカラムモ、幸ニ心ヲ安シ別業ニ起臥シテ静養セラレムコトヲ請フ」と、言い放っている。[100] 桂の自信の表れである。

桂は、桂系官僚である江木翼に対して、「自分は君の進言通り、近く政党を組織して、将来は政党内閣を実現する積りである。故に今回の内閣は臨時の積りで、自分の一言で何時でも辞職させることが出来る人々を以て組織する考である」と語ったという。実際、組閣では桂直系で固めることにした。[101]

外相には、今は亡き小村の代替的人物として、加藤高明を就けることに成功した。[102] しかし、桂のブレーンを任じていた後藤は、「三菱系にして消極の僻論家」である加藤が入閣すると内閣の破綻は必ず起き、また「老衰英国的所見」の加藤が外相に就任すると満州問題で「退縮主義」になるとして、猛反発した。[103] ちなみに後藤はこのころ、奉天総領事・関東都督府民政長官・満鉄総裁を兼任させ、この下に各領事を置くという、満州行政機関の統一構想を抱いていたが、[104] この点でも外務省による外交一元化を求める加藤とは真っ向からぶつかるのであろう。

結局、外相には加藤が就任するが、これは桂が後藤の反対を押し切ってのことであった。なぜなら、加藤が小村寿太郎と同様、日英同盟を日本外交の機軸にすえていたことを評価したからであろう。さらに、加藤は外相就任後、満州権益の期限延長問題の解決に自ら取り組もうとした。これは、前述の通り、桂や本野一郎の主張と方向性を同じく

していた。第三次桂内閣は短期間に倒れたため、実際には何もせずに終わったが、第二次大隈重信内閣で再び外相に就任した加藤は、同問題に実際に取り組むことになる。悪名高い対華二一ヵ条要求である。

話を第三次桂内閣の組織に戻すと、後藤は「隠謀家連中」の入閣も、政友会の反抗を招くとして反対している。[105] この「隠謀家連中」とは、反政友合同工作を担当していた大浦兼武を指すのであろう。しかし、大浦も、後藤の反対にもかかわらず入閣することになった。桂からすれば、大浦には大浦なりの使い道があるのである。

陸相には桂系軍務官僚である木越安綱をあてた。一方、海相については難航した。海軍が海軍軍拡に着手しない場合は斎藤実を留任させないと言い張ったため、斎藤海相を留任させるべく、桂は再度勅語を利用、二二日に斎藤留任の勅語を引き出した。

一二月二一日、第三次桂内閣が発足した。顔ぶれは次の通りである。

総理：桂太郎　外務：桂太郎（臨時兼任）　内務：大浦兼武　大蔵：若槻礼次郎　陸軍：木越安綱
海軍：斎藤実　司法：松室致　文部：柴田家門　農商務：仲小路廉　逓信：後藤新平

外相に就任予定の加藤は駐英大使なので、加藤の帰国・外相就任までは、桂が外相を兼任することにした。加藤はロシアの首相・外相やフランス・ドイツの外相と会談したのちにシベリア鉄道に乗り、途中伊集院彦吉（駐華公使）から中国の現状を聞き、また寺内（朝鮮総督）にも面会するため、東京着が二月四〜五日頃になりそうであった。[106]

また、内相には、従来反政友合同のための政界工作を担当していた大浦兼武をあてた。これは少なくとも政友会にとっては、政友会と戦うための布陣と受け取られ、政友会の反感を助長することとなった。[107]

第三次内閣の政綱と桂内閣の不評

親任式当日、桂が閣僚に対して行った訓話では、閣外の元勲（元老）と政治を私議することは、元勲に累を嫁し、かつ閣僚たる自己の本分を忘れることだとして、今日時世の進運に伴いこの弊害を廃するよう訴えている。[108]

桂内閣は政綱の一つに「外交の不振に対し刷新を加ふること」を掲げた。[109] 西園寺内閣の外交政策に対する批判である。桂は宇都宮太郎（参謀本部第二部長）に対して、「今回ハ……愈満洲問題ヲ解決ス」と語ったというが、[110] この「満洲問題」の解決とは、直接的には本野が主張する満州権益の期限延長問題の解決を意味し、さらに将来的には日露による満蒙分割をも含意するものであろう。

また、財政政策としては、陸軍拡張・海軍拡張・税制整理（減税）を全て延期して（ただし、斎藤海相の留任条件である海軍充実費三〇〇万円は認める）、五〇〇〇万円の行財政整理を実行することを政綱に掲げた。[111] 西園寺内閣は、三七〇〇万円の整理を計画していたので、さらなる行財政整理である。新たに予算案を作成する暇もないので、とりあえず一九一二年度予算をそのまま踏襲して、実際には五〇〇〇万円整理を実行することを議会で声明することにした。[112]

陸海軍の拡張を延期したうえで、内閣と陸海軍の間を調整する機関として、国防会議の設置も政綱に掲げた。[113] もちろん、二個師団増設のために西園寺内閣打倒まで突き進んだ陸軍省の中堅クラスからすれば、桂の方針は納得できないものであった。田中義一は一七日に桂へ書翰を送り、増師が無意義に延期されては陸軍の主張は全く政略の具に供された観を呈し、未来永劫、陸軍は威信を失うと強く訴えた。[114]

さらに、政綱には含まれていないが、桂は陸海相文官制をも考慮に入れていた。[115] 今や陸軍軍人よりも政治家としてのアイデンティティーを抱いていた桂は、軍部大臣現役武官制が内閣倒壊の制度的原因となっている現状に鑑みて、

内閣の安定化のためには制度改変の強行をも射程に入れていたのであろう。

このように政綱は画期的な内容を含むものであったが、桂の内閣組織は、世間的にはなはだ不評であった。西園寺内閣倒壊の原因となった二個師団増設問題の背後には山県ないし桂が存在すると考えられ、増師問題によって西園寺内閣を倒した山県が、自己の直系の桂を宮中から呼び戻して政権にすえたとして、ごうごうたる非難の声が巻き起こった。しかも、桂が宮中を去るにあたり、また海相を留任させたために大正天皇の勅語を利用したことは、世人をして桂に対して激しい論難を加えさせることとなった。新聞・雑誌といったマスコミや政友会などの代議士は、「閥族打破、憲政擁護」をスローガンに内閣へ吶喊（とつかん）し始めた。

そして、この憲政擁護運動ないし第一次護憲運動は、代議士やメディアのみならず、広く社会全体を揺り動かしつつあった。たとえば、大阪毎日新聞社長の本山彦一は後藤新平に対して、「有識者有志者は勿論、男女学生より素町人土百姓馬丁車夫に至る迄湯屋髪結床にて噂の種となり、元老会議之不始末に対しては裏店井戸端会議に上り、炊婦こまつかひ迄が窃かに罵り合候様之次第」を報じ、万一新聞が教唆したならば日比谷焼き打ち事件の再来となるかもしれないという。このような下層社会における政治思想普及の原因として、本山は、米価高騰、税の高負担、諸専売にもとづく、下層民の困窮・怨嗟を指摘している[16]。

おわりに

以上見てきたように、西園寺内閣の外交・財政政策に不満な桂は、満を持して第三次内閣を組織した。しかし、天皇の勅語を頻繁に利用したことは、護憲運動を広範に引き起こすこととなり、桂は「閥族打破、憲政擁護」の猛烈な非難にさらされた。桂は新党構想を前倒しして、一九一三（大正二）年一月二〇日、新党結成を発表する。それも、

桂は当初、「立憲統一党」という政党を構想していた。この「立憲統一党」構想には、桂の「遅れてきた元老」としての意識が端的に反映するであろう。「立憲統一党」構想の具体的な展開に関しては、準備中の別稿[11]に譲りたい。

---

〔1〕一九一〇年一月一二日付徳富蘇峰宛桂太郎書翰、千葉功編『桂太郎発書翰集』（東京大学出版会、二〇一一年、以下『桂書翰』と略記）三〇七頁。
〔2〕原奎一郎編『原敬日記』第三巻（福村出版、一九六五年、以下『原日記』と略記）一九一〇年一二月一四日条。
〔3〕『原日記』一九一一年七月一二日条。
〔4〕『原日記』一九一一年八月二六日条。
〔5〕尚友倶楽部・櫻井良樹編『田健治郎日記二』（芙蓉書房出版、二〇〇九年、以下『田日記』と略記）一九一一年八月八日条。
〔6〕一九一一年八月二八日付桂太郎宛渡辺千秋書翰、千葉功編『桂太郎関係文書』（東京大学出版会、二〇一〇年、以下『桂文書』と略記）四八六〜四八七頁。一九一一年八月二九日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』二七四頁。
〔7〕『原日記』一九一一年八月二五・二六・二八日条。
〔8〕一九一一年八月三〇日付山県有朋宛桂太郎書翰、『桂書翰』四二四頁。『原日記』一九一一年八月三〇日条。若槻礼次郎『明治・大正・昭和政界秘史　古風庵回顧録』（講談社、一九八三年、以下『古風庵回顧録』と略記）一六〇〜一六一頁。
〔9〕一九一一年九月一六日付山県有朋宛桂太郎書翰、『桂書翰』四二四頁。
〔10〕一九一一年九月二二日付山県有朋宛桂太郎書翰、『桂書翰』四二四〜四二五頁。
〔11〕一九一一年一二月一日付山県有朋宛桂太郎書翰、『桂書翰』四二五〜四二六頁。
〔12〕『原日記』一九一一年一一月二〇日条。
〔13〕下重直樹「日露戦後財政と桂新党―桂系官僚と財界の動向を中心に―」『日本歴史』第七一〇号（二〇〇七年）六四頁。
〔14〕一九一一年一〇月二三日付後藤新平宛桂太郎書翰、『桂書翰』二〇七頁。

〔15〕一九〇〇～一九年における日本外交については、拙著『旧外交の形成　日本外交一九〇〇～一九一九』（勁草書房、二〇〇八年）を参照。
〔16〕一九一一年一一月三日付寺内正毅宛桂太郎書翰、『桂書翰』二九一～二九二頁。一九一一年一二月一日付山県有朋宛桂太郎書翰、『桂書翰』四二五～四二六頁。
〔17〕内田康哉伝記編纂委員会・鹿島平和研究所編『内田康哉』（鹿島研究所出版会、一九六九年）一六〇頁。
〔18〕一九一一年一二月一日付山県有朋宛桂太郎書翰、『桂書翰』四二五～四二六頁。
〔19〕一九一一年一二月一一日付山県有朋宛桂太郎書翰、『桂書翰』四二六～四二七頁。
〔20〕一九一一年一一月一二日付桂太郎宛後藤新平書翰、『桂文書』一七三～一七五頁。
〔21〕一九一二年一月七日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』二七五～二七六頁。
〔22〕一九一二年一月一五日付桂太郎宛山県有朋書翰、『桂文書』四四一～四四二頁。
〔23〕一九一二年二月四日付寺内正毅宛桂太郎書翰、『桂書翰』二九二～二九三頁。
〔24〕一九一二年二月八日付山県有朋宛桂太郎書翰、『桂書翰』四二七頁。
〔25〕一九一二年二月一八日付明石元二郎宛桂太郎書翰、『桂書翰』一四頁。
〔26〕一九一二年二月一八日付後藤新平宛桂太郎書翰、『桂書翰』二〇八頁。
〔27〕一九一二年二月九日付桂太郎宛山県有朋書翰、『桂文書』四四二頁。一九一二年三月四日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』二七七頁。
〔28〕一九一二年二月一九日付平田東助宛桂太郎書翰、『桂書翰』三五〇～三五一頁。
〔29〕一九一二年三月四日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』二七七頁。
〔30〕一九一二年三月一三日付寺内正毅宛桂太郎書翰、『桂書翰』二九三～二九四頁。
〔31〕一九一二年三月二八日付寺内正毅宛桂太郎書翰、『桂書翰』二九四～二九五頁。
〔32〕加藤高明伯伝編纂委員会編『加藤高明』（原書房、一九七〇年）上巻六八七～九〇頁。
〔33〕『原日記』一九一〇年一一月一二日条。
〔34〕一九一二年五月一九日付寺内正毅宛桂太郎書翰、『桂書翰』二九七～二九八頁。
〔35〕一九一二年五月二三日、六月一二日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』二八〇～二八一頁。

〔36〕一九一二年七月五日付後藤新平宛桂太郎書翰、『桂書翰』二〇八～二〇九頁。
〔37〕一九一二年五月二七日付寺内正毅宛桂太郎書翰、『桂書翰』二九八～二九九頁。一九一二年五月二九日付桂太郎宛西園寺公望書翰、『桂文書』二一四頁。一九一二年六月一日付山県有朋宛桂太郎書翰、『桂書翰』四二七～四二八頁。
〔38〕『原日記』一九一一年七月一日条。
〔39〕田中収吉編『公爵桂太郎述　処世訓』（宝文館、一九一二年）一五六～一六四頁。
〔40〕一九一二年七月二七日付加藤高明宛桂太郎書翰草稿、『桂書翰』一五四～一五六頁。一九一二年七月二五日付畑良太郎宛桂太郎書翰草稿、『桂書翰』三三五～三三六頁。
〔41〕徳富猪一郎編『公爵桂太郎伝』（故桂公爵記念事業会、一九一七年、以下『桂伝』と略記）坤巻五六八～五六九頁。
〔42〕『東京朝日新聞』一九一二年七月一日。
〔43〕一九一二年七月二〇日付桂太郎宛加藤高明書翰、『桂文書』一三五～一三六頁。
〔44〕『古風庵回顧録』一六七～九頁。
〔45〕鶴見祐輔編著『後藤新平』第三巻（勁草書房、一九六六年）四一二頁。
〔46〕一九一二年七月四日付桂太郎宛渡辺千秋書翰、『桂文書』四八九～四九一頁。
〔47〕一九一二年七月二七日付加藤高明宛桂太郎書翰草稿、『桂書翰』一五四頁。
〔48〕「桂公ノ外遊ニ就テ」、「桂太郎関係文書」八八―四（国立国会図書館憲政資料室所蔵）。
〔49〕前掲『処世訓』一七二～一七五頁。
〔50〕一九一二年七月二五日付桂太郎宛畑良太郎書翰、『桂文書』三〇二～三〇五頁。一九一二年七月二七日付畑良太郎宛桂太郎書翰草稿、『桂書翰』三三五～三三六頁。
〔51〕外務省政務局第三課編『日露交渉史』（原書房、一九六九年）二四六～七頁。
〔52〕一九一二年六月二八日、七月二日付桂太郎宛徳大寺実則書翰、『桂文書』二九一～二九二頁。
〔53〕桂の渡欧については、藤井貞文『近代日本内閣史論』（吉川弘文館、一九八八年）一六九～二五四頁を参照。
〔54〕外務省編『日本外交文書』第四五巻第二冊（日本国際連合協会、一九六三年）七二五～六頁。吉村道男『増補　日本とロシア』（日本

経済評論社、一九九一年）五一頁。櫻井良樹「加藤高明と英米中三国関係」長谷川雄一編著『大正期日本のアメリカ認識』（慶應義塾大学出版会、二〇〇一年）九〇頁。

〔55〕一九一二年七月二七日付加藤高明宛桂太郎書翰草稿、『桂書翰』一五四頁。

〔56〕一九一二年七月二七日付加藤高明宛桂太郎書翰草稿、『桂書翰』一五四頁。

〔57〕一九一二年七月一九・二〇日付桂太郎宛加藤高明書翰、『桂文書』一二五～一三六頁。

〔58〕前掲『処世訓』一七〇～一七一、一七五～一七七頁。

〔59〕一九一二年七月二五日付桂太郎宛畑良太郎書翰草稿、『桂文書』三〇二～三〇五頁。

〔60〕一九一二年七月二〇日付桂太郎宛加藤高明書翰、『桂文書』一三五～一三六頁。

〔61〕一九一二年七月二五日付桂太郎宛畑良太郎書翰『桂文書』三〇二～三〇五頁。一九一二年七月二七日付畑良太郎宛桂太郎書翰草稿、『桂書翰』三三五～三三六頁。

〔62〕『古風庵回顧録』一七二～一七三頁。

〔63〕一九一二年八月一一日付桂太郎宛平田東助書翰、『桂文書』三二三頁。

〔64〕『原日記』一九一二年八月一二日条。

〔65〕一九一二年八月二八日付桂太郎宛後藤新平書翰、『桂文書』一七六～一七七頁。

〔66〕一九一二年九月三日付桂太郎宛加藤高明書翰、『桂文書』一三八～一三九頁。

〔67〕一九一二年九月一四日付陸奥広吉宛加藤高明書翰、「加藤高明関係文書」三七（国立国会図書館憲政資料室所蔵）。

〔68〕『桂伝』坤巻六〇二～六〇五頁。

〔69〕一九一二年九月一日付青木周蔵宛桂太郎書翰、『桂書翰』九～一〇頁。

〔70〕一九一二年一〇月二二日付桂太郎宛山県有朋書翰、『桂文書』四四五～四四六頁。

〔71〕一九一二年九月一一日付山県有朋宛桂太郎書翰、『桂書翰』四二八～四二九頁。

〔72〕一九一二年九月一六日付寺内正毅宛桂太郎書翰、『桂書翰』三〇〇頁。一九一二年九月一五・一六日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』二八二頁。

〔73〕『原日記』一九一二年八月一八日、九月一二日条。
〔74〕『原日記』一九一一年四月一四日条。
〔75〕『原日記』一九一一年七月一日条。
〔76〕『原日記』一九一三年五月二八日条。
〔77〕『原日記』一九一二年八月一二日条。
〔78〕『原日記』一九一二年八月一七・一八日条。
〔79〕一九一二年九月五日付桂太郎宛後藤新平書翰、『桂文書』一七七〜一八二頁。
〔80〕一九一二年一一月一七日付桂太郎宛上原勇作書翰、『桂文書』九八〜九九頁。
〔81〕一九一二年九月一五日付桂太郎宛本野一郎書翰、『桂文書』三四五〜三四七頁。
〔82〕一九一二年一〇月一三日付山県有朋宛桂太郎書翰、『桂書翰』四二九頁。
〔83〕一九一二年一〇月一七日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』二八二〜二八三頁。
〔84〕『原日記』一九一二年一二月二日条。
〔85〕木村毅編『西園寺公望自伝』（大日本雄弁会講談社、一九四九年）一四三頁。
〔86〕『原日記』一九一二年一一月一五・一六・二三・二五・二七日条。
〔87〕一九一二年一一月二八日付桂太郎宛山県有朋書翰、『桂文書』四四七頁。
〔88〕一九一二年一一月一日付山県有朋宛桂太郎書翰、『桂書翰』四二九〜四三一頁。『桂伝』坤巻六七一〜六七三頁。
〔89〕一九一二年一二月七・一〇日付桂太郎宛平田東助書翰、『桂文書』三二三〜三二四頁。伊藤隆編『大正初期山県有朋談話筆記　政変思出草』（山川出版社、一九八一年、以下『山県談話』と略記）三六〜三七頁。
〔90〕「桂太郎関係文書」八四―三（国立国会図書館憲政資料室所蔵）。一九一二年一二月一〇日付桂太郎宛山県有朋書翰、『桂文書』四四七〜四四八頁。
〔91〕『山県談話』三七〜三九頁。
〔92〕一九一二年一二月付桂太郎宛平田東助書翰、『桂文書』三二四〜三二五頁。

〔93〕一九一二年一二月一六日付寺内正毅宛桂太郎書翰、『桂書翰』三〇一頁。
〔94〕一九一二年一二月一六日付寺内正毅宛桂太郎書翰、『桂書翰』三〇一頁。
〔95〕『原日記』一九一二年一二月一三・一五日条。
〔96〕前掲『西園寺公望自伝』一六三～一六四頁。
〔97〕山県有朋「大正政変記」、山本四郎『大正政変の基礎的研究』（御茶の水書房、一九七〇年）六四四頁。
〔98〕宇野俊一『桂太郎』（吉川弘文館、二〇〇六年）二五〇頁。
〔99〕一九一二年一二月付桂太郎宛渡辺千秋書翰、『桂文書』四九二頁。
〔100〕山県有朋「大正政変記」、前掲『大正政変の基礎的研究』六四一頁。
〔101〕『原日記』一九一二年一二月一八日条。
〔102〕一九一二年一二月二一日付桂太郎宛加藤高明書翰、『桂文書』一三九～一四〇頁。
〔103〕一九一二年一二月一四日付桂太郎宛後藤新平書翰、『桂文書』一八二～一八三頁。
〔104〕一九一二年一二月付桂太郎宛後藤新平書翰、『桂文書』一八七頁。
〔105〕一九一二年一二月一四日付桂太郎宛後藤新平書翰、『桂文書』一八二～一八三頁。
〔106〕一九一二年一二月二一日付桂太郎宛加藤高明書翰、『桂文書』一八二～一八三頁。
〔107〕『原日記』一九一二年一二月一七・一八日条。
〔108〕一九一二年一二月付桂太郎宛渡辺千秋書翰、『桂文書』四九二頁。
〔109〕「桂内閣の新政綱」『国民新聞』一九一二年一二月一九日。櫻井良樹『大正政治史の出発　立憲同志会の成立とその周辺』（山川出版社、一九九七年）一七〇～一頁。
〔110〕坂野潤治ほか編『財部彪日記』下巻（山川出版社、一九八三年）一九一三年一月二八日条。
〔111〕『田日記』一九一二年一二月一九日条。『桂伝』坤巻六二七頁。
〔112〕『古風庵回顧録』一八一頁。
〔113〕一九一二年一二月付桂太郎宛平田東助書翰、『桂文書』三二四～三二五頁。一九一二年一二月一〇日付桂太郎宛山県有朋書翰、『桂文書』

四四七〜四四八頁。

〔114〕一九一二年一二月一七日付桂太郎宛田中義一書翰、『桂文書』二五〇〜二五一頁。

〔115〕『田日記』一九一三年一月八日条。

〔116〕一九一二年一二月二四日付後藤新平宛本山彦一書翰、『桂文書』一八三〜一八四頁。

〔117〕「大正政変と桂新党―「立憲統一党」構想の視点から」坂本一登・五百旗頭薫編『近代日本の政党制と官僚制』（日本経済評論社、二〇一二年刊行予定）。

（史学科　教授）